

病虫害発生予察特殊報第1号

平成11年5月27日
三重県病虫害防除所

本県において、コムギ縞萎縮病の発生が33年ぶりに確認されたので特殊報として発表する。

1. 病虫害名：コムギ縞萎縮病
(コムギ縞萎縮ウイルス：WYMV)
2. 発生確認作物名：コムギ
3. 発生確認地域：北勢および中南勢
4. 発生確認の経過：2月下旬から、嬉野町須賀地区の集団麦作ほ場において葉の黄化が目立つようになったため、3月中旬にムギを採取し調査したところ、県農業技術センターでは表皮細胞から本ウイルスのX体を確認した。また、農林水産省農業研究センター病虫害防除部ウイルス病研究室に同定を依頼したところ、エライザ法によりコムギ縞萎縮病であることが明らかとなった。
その後、県下の主要な麦作地域を調査し、北勢および南勢地域でも発生を確認した。
本県では、昭和41年に発生の記載があるものの、それ以降本病の確認はされていない。
5. コムギ縞萎縮病について
 - 1) 病徴
 - ・ほ場全面あるいは条状に黄化する。
 - ・黄緑色の細長いかすり状の斑点または褐色のえそ斑が葉脈に平行して葉と葉鞘に表れ、次第に拡大、融合する。
 - ・新葉はやや細く内側に巻き、淡黄緑色の退色斑を生じ、次の葉が出る頃にモザイク症状となる。
 - ・分けつ数が減少し、草丈が低くなる。根の伸長は悪く新根の発生は減少する。
 - ・下葉は黄変して葉先から淡褐色となり次第に枯れる。
 - ・肥料不足、湿害のように見える。
 - 2) ウイルス伝染の様式
 - ・寄主はコムギに限られる。
 - ・種子伝染、接触伝染、虫媒伝染はしない。
 - ・ウイルスを保毒した*Polymyxa graminis*菌がコムギの根に寄生することにより感染する。
(3~15cmの土壌で感染が多い) また、ウイルスは同菌とともに土壌中に残り伝染源となる。(*Polymyxa graminis* 菌の休眠胞子は非常に安定している)
 - ・ウイルスの感染適温は10~16℃であり、播種後10日で感染する。(20℃以上および5℃以下では感染しない)
 - ・12月以降の低温は発病を促進し、20℃以上で病徴は明らかではなくなる。
 - 3) 発生しやすい条件
 - ・播種後10日間の気温が高いと発病率が高く、早播きすると発生が多い。
 - ・冬期間低温の年は多発する。
 - ・排水不良は発生を助長する。
6. 防除対策
 - 以下の耕種的防除を行うことにより発生を抑え、被害を軽減する。
 - ・極端な早播きを避け、適期は種を心がける。
 - ・排水対策を行う。